

自然と文化科 活動記録 (研究部共通講座)

日時	2025 年 8 月 1 日 (金) 10:00~12:00	担 当 者
場所	福島区民センター・ホール : 午前 研究部共通講座 : 午後 委員会別活動	文・写真 : 藤川 宗昭
備考	参加者数 1 班 23 名 2 班 19 名 3 班 17 名 4 班 18 名 合計 77 名	

1. 講演のテーマ：里山林の保全 ～成り立ちと現状・課題～
2. 講演者名：大阪公立大学農学部緑地環境学科 上田萌子准教授
3. 講演要旨：

- ・里地里山とは原生的な自然と都市の中間に位置し、集落とそれを取り巻く雑木林、それらと混在する農地、ため池、草原などで構成される地域。農林業などの人間活動を通じて環境が形成・維持、国土の約 4 割を占める。里地里山は生物多様性の保全など SDGs の目標 15「陸の豊かさを守ろう」の舞台。



- ・里山林の成り立ち

里山林は燃料、肥料採取のため、人為的管理の継続で維持されてきた樹林(自然植生→代償植生)。

里山林持続の 3 原則は更新(クヌギ、コナラなどの萌芽更新、アカマツ、ブナなどの天然下種更新)、輪伐(パッチワーク状の植生景観)、シバ刈り。



- ・里山放置林への移行

里山林は、水田耕作が始まる弥生時代から約 3000 年継続してきたが、昭和 30 年代の燃料革命により、木炭、薪、柴の需要がなくなり、ほとんどの里山林が里山放置林へと変化。



- ・里山放置林の現状

照葉樹の繁茂、つる植物、ササ類、コシダ・ウラボシの繁茂、シカの食害、ナラ枯れ・マツ枯れ、竹林の拡大、植栽種の侵入などで生物多様性が減少。

- ・里山林のこれからの方向性—多面的機構林への誘導

環境(水源、多様性)、減災(浸食防止)、文化(学習・教育・景観)機能を重視し、多面的機構林への誘導。これらを地域固有の資源として、地域づくりに活用する。その際の担い手は市民ボランティア。

4. 感想：

里山林は農耕生活において人々の生活活動に組み込まれ、必要不可欠なものとして管理維持されてきたが、燃料、肥料等への利用が不必要になり、数 10 年間放置されたままになっている現状からみると、講師が最後に触れられた里山林の多面的機構林への誘導のお話はせいぜい市町村単位の自然公園の整備ぐらいしか実現性は薄いのではないかと思います。